

再び言う。零下四、五十度の酷寒の地で強制労働と栄養失調と闘い、ロシア兵の罵声を耐え忍び、四年間の長期にわたる海外旅行をして来たと思つて、自分自身に言い聞かせて慰めるしかしようがない。今の私は、諺に言う「上を見ればきりが無い。下見て暮らせ」である。

【執筆者の紹介】

出生 大正八（一九一九）年八月八日樺太真岡町にて津田勇吉三男として

本籍 七尾市一本杉町

改姓 昭和十年五月二日、叔父・通嘉四郎の養子となる

入隊 昭和十八年十二月、樺太にて召集 旭川部隊に入隊

終戦 樺太落合町

抑留地 二十年冬、大泊港よりシベリア沿海州に上陸、抑留される

抑留中 沿海州各地を転々として鉄道建設等に従

事する

復員 昭和二十四年八月、召集解除

現在 長く教員をしていた妻を三年前に亡くし、現在は息子夫婦と同居

職業等 長く自営業を営むも、現在は隠居して写経等を趣味とするほか、市健老大学講座

等では「シベリア抑留体験談」を講演している。

（石川県 山本 利男）

シベリア抑留記

福井県 横田 肇

戦後、ソ連の抑留に遭い、昭和二十四（一九四九）年秋に帰還して、はや五十年あまりが過ぎ去り、今、その当時を振り返ってみると、記憶の鮮明な部分と曖昧な部分まぼが折り重なってくる。

曖昧な部分は、連鎖的に記憶をたどりながら記して

みたいと思います。記憶違いもあるうかと思いが、御寛容のほど願います。

兵役

昭和二十年二月、満州第九二二部隊に入営せよ、なお三月六日に広島市西條練兵場に集合のこと。

両親が出征前に親戚を集めて送別の宴（戦時中で質素）を開いてくれた。西哲二（故人）という方（父親と従兄弟）が私を陰に呼んで、「絶対死んでは駄目、どんなことがあっても必ず生きて帰って来いよ」と言われたことが、苦しい時になるといつも思い出された。特にシベリア抑留での病気になった時等に。

広島に二、三日いて下関で乗船（興安丸）、釜山に上陸。夜中に汽車に乗り、京城（ソウル）から右に日本海に見送られて豆満江を渡り牡丹江に到着。乗り替えて伊林駅（牡丹江の東）で下車。部隊の兵隊が大勢出迎えに来てくれた。故郷をたつ時には大雪で下屋の上を歩いてきたのに、ここでは僅かの雪しかないので不思議に思えた。

ここまでは戦闘ということが頭の中には詰まっても実感としては薄く、例えば悪いが汽車の中は修学旅行の気分だった。

三十分ほど行軍して部隊（独立工兵一二連隊）へ到着。中隊、小隊、分隊の編成が終わり兵舎へ入る。自分の場所の棚上の箱等に自分の名前が記入してあり、その親切に感激した（二、三日前から古年兵が準備してくれていた）。

初年兵教育訓練は今までの学校教練の延長のような感じで、初めて習ったことは戦車壕掘り、爆薬の雷管の結束、鉄舟漕ぎ、植杭等であった。

一期の検閲が終わって一息ついていたら、一部を留守隊に残し横道河子の山中に陣地構築せよとのことで兵舎を後にした。横道河子の山中の兵舎はバラックで、食事は雨さえ降らねば外の長机、長椅子でとる状態だった。作業には満人の苦力を使っていた。夜になると狼の遠吠えがあちらこちらから聞こえてきた。

私たち甲種幹部候補生は横道河子の本部で集合教育が始まり、八月九日、市街地での訓練があり休憩の

時、ソ連が東の方面から国境線を突破して侵入して来たとの連絡があり、そのまま本部へ引き揚げた。

部隊本部では夜になると対戦車肉迫攻撃班が編成され牡丹江方面へ出撃したが、ソ連戦車と遭遇せず翌朝に帰隊するということが度々あった。その頃から前線で負傷した兵隊たちがバラバラで横道河子へ入ってくるのが見えた。

死ぬかもしれぬと思ったが悲壮感はなかった。日中はソ連の飛行機が時折飛来して機銃掃射をしてきたが、我が軍からの反撃は特になく残念な思いだった。

終戦・抑留

ソ連との停戦が成立したとの話が出てホッとしていたら、停戦でなく日本が負けたとのこと。しかし、我々はノモンハン事変の時のようなものと思っていた。その夜、横道河子の夜間警備に五人で出たが、人っ子一人見当たらなかった。

八月十六日昼前に部隊長から「日本が全面降伏したのでソ連軍が入ってきてても抵抗せずに」とのことで、気持ちの支えがなくなり呆然と立ちつくしていた。反

面、これで死なずに済むとも思った。満州に知人があ
る人や地理に詳しい人たちはその夜のうちに逃げ出し
たが、無事帰国できたかは分からない。

十八日朝、ソ連兵が戦車とトラックで入って来て武
装解除。丸腰となつて何とも無力になった思いがひし
ひしと迫ってきた。

抑留（捕虜）

牡丹江に集まれとのこと、三日ほど歩いて牡丹江
郊外の拉古の病馬廠に到着。トタン張りの三角屋根の
小屋（床はなし）に入れられる。

早速、炊飯の準備として薪集めに行く。食糧は横道
河子を出る時に持てるだけ持って来たもので賄った
が、ここでソ連から配給されたのは皮つきの高梁だっ
た。これは炊くのに時間がかかり、後々の炊飯でも一
苦労した。

行軍中の模様を述べてみよう。朝、夜明けと同時に
出発。整列させて人員点呼。なかなか人数が合わない。
ソ連兵は掛算ができないらしい。道中には至るところに
我が軍の戦死者の遺体や軍馬の死骸が転がって

おり、腐敗した臭いがあたり一面に漂っていた。死者をどうすることもできず、歩きながらの合掌をして通り過ぎた（隊列が乱れるとソ連の警戒兵が銃の尻で叩く）。途中の休憩は、止まった場所ので腰を下ろすだけで列を離れることもできなかった。

夕方薄暗くなる頃に野営となり、手分けして水を採って汲む者、薪を探しに山へ行く者、火を燃やして飯盒を掛ける準備をする者と、行軍の疲れにもかかわらず頑張った。夕食を食べ、その後、翌日の朝と昼の炊飯をしてやっと寝られた。

日によって夕方から雨が降り出し、飯も炊けず寝ることもできず、近くの石や木に腰掛け、かっぱ（携帯天幕）を頭から被ってウトウト寝たこともあった。このような雨は朝には上がり日が照り、飯なしでの行軍となる。

炊飯の水汲みをした近くに人馬の死体が浮いているのが朝歩くようになって分かり、吐き気がしてきたのも私一人ではなかった。

行軍途中に農作物があると、警戒兵の目を盗んで

キャベツ、トウモロコシなどを取りに行った。これも炊飯グループで荷物を持つ者、取りに行く者に分かれた。警戒兵はこの時は見て見ぬ振りで見逃してくれた。あとで考えてみると、他の季節で農作物が全くなかったら落伍者ももっと多かつたらろうと思う。このことは、後ほどの拉古から綏芬河までの行軍でも同じことが言える。

休憩になるとカンボーイ（警戒兵）が相手かまわずに腕時計、万年筆等を探しに来て強奪する。見つかって拒否するとマンドリン（ソ連の自動小銃、丸い弾倉がついていてマンドリンに似ていた）を向けて威嚇し、時には空へ向けて発砲する始末で大変なことだった。中には黒バン一個（二キログラム）と交換を申し込むソ連兵も現れた。片腕いっぱい時計を付けている兵隊もいた。

合理的に思ったのは、トラックの後ろに二輪の炊飯釜を引っ張って走りながらスープを炊いていて、兵隊は一人ずつ主食の黒バンと丸い飯盒と一緒にズックの背囊に入れていて、炊飯の時間は不要なことでした。

拉古での日常は、食糧の米はなくなり高粱だけなので、副食を探すことと燃料探しで、古年兵達は馬を殺して食糧にしていたこともあったようだ。

九月初めにソ連の将校から「ウラジオストク經由で日本へダモイ（婦国）させることになった。満州内は汽車が通らないのでソ連領までは歩くように」とのことだった。先に述べた地獄の行軍に十日ほどかかって緩芬河に到着した。国境近くで二泊ほどしてソ連領に入った。落伍した者は満州人に所持品を全て略奪され、命を奪われた者もおったようだ。

ソ連領に入ってから、野菜はもろろん、落ちていく薪のような物でも取ることは厳禁となり、一日歩いてグロデコーボの町はずれに到着。ここでも野宿となる。ソ連の女、子供が物珍しげに見に来ていたが、彼等の身なりはみすぼらしく、ほとんどの人が裸足でした。時間がたち警戒兵も少なくなると、下着やいろいろの所持品と黒パンの交換が行われた。

貨車が入り「スコーラ ダモイ（間もなく帰れる）」と言われ、本当に帰国できると思い喜んで乗車した。

貨物車は左右が二段になって中央にストープが置いてあり、四、五十人が押し込まれた。出入口は十センチほどの隙間を開けて針金で締められた。窓は上の方に二つばかり小さいのがあるだけで、日中でも薄暗く牛馬同様の扱いで、電灯はもろろんなく、便所もなく、本当に家畜以下の扱いだった。用便は小の方は扉の間から、大は停車を待つて外で済ませた。

夜中に走って日中は停車の時間が多く、その間に食事の準備や用便を済ますまで、どこにいるのかも分からず、ただ太陽の方向から見ると南の方へと走っていたので帰れると思いつ込んでいた。

翌朝目が覚めてみると、汽車はいつまでたっても北東の方向に進んでいるので騒然となったが、いかんともしがたし。薄暗くなって下車させられ（後になってスイソエフカとわかる）、小休止の後、かなり歩かされて山の中の小屋にたどり着いた。

小屋は以前はドイツの捕虜がいたとのこと。朝になって見たら、直径十センチほどの丸太を横に積み上げ、外側に土が張りつけてあり、屋根も丸太を斜めに

掛けて土が載せてあった。中は丸太を並べた床が二段になって、中央は土間の通路となっていた。

一週間ほど環境整備で、炊事場作り、便槽掘り（板を渡してその上で用足し）、床の草敷きのための草乾燥等で過ごした。その間の食事は飯盒の中蓋一杯の高梁雑炊（スープに近い）で、腹が空いて、寝る時に横道河子から持って来た乾パンを少しずつ食べて空腹の足しとした。

作業に出るようになった。伐採とのことで、三人一組で長さ四尺（約一・二メートル）ほどの鋸とタボー（斧）が各一つ。鋸は両端に持ち手があり、二人で引くとのこと。使ってみて、なかなかうまく切れなかった。

ノルマは、三人一組で立木を倒し、二メートルの長さに輪切りした木材をトラック一台に積み込むことで、不馴れな仕事のためノルマができず、夜遅くまで帰られぬことが多かった。

月夜の晩には、故郷でもこの月を見ているかな、いや、きっと見ていると思しながら、両親を思い出し妹

をしのんで長い間眺め、いつの日帰れることやらと思いました。

病氣と入院

十月末ごろに突然熱を出し、これという薬もなく一日に二度ほどの発熱を繰り返す。熱が出ると寒くてたまらず、ストーブを抱きかかえるようにしても震えが止まらない日が続いた。ある日、入院することとなった。他の何人かの病人と一緒に、入営した時の戦友と別れた。行き先は満州とのことで、ソ連管轄から中国の管轄になるとのこと。今まで中国を苛めてきたからひどい目に遭うかもしれないという噂話も上の空で聞いていた。

トラックと汽車を乗り継ぎ到着した所は牡丹江郊外で、建物は過去に関東軍特別大演習のとき造った仮設兵舎とのこと。

軍医はソ連兵の男女各二人ほどだと思ふ。その下に同じく看護婦がおり、病舎の食事、掃除等の世話には日本の衛生兵（自称）がいた。病院とは名ばかりで、二、三日に一回、ラッパの型をした聴診器で診察し、

薬は一日一包を飲むだけで、二週間ほどしたら薬はなくなつた。

食事は飯盒の蓋八分目の粥が出ただけで、寝ていても空腹を満たせるものではなかつた。

少し病状の良くなつた者は、病院の敷地外へ水汲み（馬車にドラム缶を数本積んで水を運ぶ）に行く馭者に何か品物を持たせて大豆と交換して、夜中にストロブで煎つて食べる者が時々いた。二、三日たつと必ず下痢をして下着を汚し、後は裸で毛布にくるまって栄養失調となり死んでゆきました。

病院でもシラミが多く、昼はストロブの側でシャツの縫目にピッシリと並んでいるシラミ退治が日課となり、横に寝ている人が亡くなると、そのシラミは全部こちらに移動して来るので大変だつた。五月ごろには衰弱して十五センチほどの段差を上がることができず、這い上がるようになり、一日寝ることが多くなつた。このころ、軽作業者の話では死亡する順番が囁かれることが時々あり、私も三番目くらいに言われた。体の自由は利かなくても耳は聞こえるので「何く

そ、絶対に死なんぞ」と、出征の時の西さんの言葉を思い出して自分に言い聞かせたものだ。

三月ごろになると少し体調も回復し、舎内での軽作業もできるようになつた。食べ物も粥かゆのほかに黒パン一切れと塩魚一切れか漬物（キュウリ、トマト）が出るようになった。

終戦後初めてバーニヤ（入浴）とのことだったが、手桶二杯の湯だけでは体の洗いうちもなかつた。石けんはキャラメル二個分ほどの大きさだったが、湯が少なく石けんは余つた。その入浴の間に衣類と所持品は熱気消毒をしてくれて、シラミが全部茶色くなって死んでいたのはありがたかつた。お陰で四、五日はゆっくり眠れた。

外に出てブラブラ歩きをして、あるテント小屋をのぞいて我が目を疑つた。そこには土の上に素裸にした死体が三段ぐらゐに無造作に積み重ねられてあつたのだ。花はおろか供物も水もなく、ソ連兵の話では、死んだらそのあたりの木材と同じだとのこと。その後二、三十体になると馬車に乗せてどこかへ運んで埋め

るとのこと、無性に腹が立った。

それから二年ほど後の冬に一人が作業中の事故で死亡した時、埋葬のために穴を掘りに行ったが、鉄棒のポールも地面に刺さらず（凍土のため）、火を燃やして凍土を溶かし一日に深さ十五センチほど（縦一メートル、横二メートルほどの広さ）が掘れただけで、人を埋められる深さになるには三日ほどかかり、十分な深さでなかったが埋葬した覚えがある。病院のときの死体はどう扱われたのか……。

労働と生活

五月ごろに女医の身体検査で、尻の皮をつままれ四級と言われ退院して、病み上がり二十人ほどがトラックで休み休み二日ほど運ばれ再び入ソ。

とあるコルホーズで降ろされ、ロシアマダムの作業の手伝いとなる。ここでは馬鈴薯の植え付けで、大きな櫛（歯の太さが十〜十五センチほどが五十センチ間隔で八本ほど付いている）を作業主任？が運転するトラックの後ろに引っ張ってできた溝の中へ種イモを並べていき、後から土をかける作業だ。休憩になるとド

ラム缶を二つに切った釜でイモを茹で、腹いっぱい食べさせてくれた。夕方になると「ハラシヨラポータ（よい働き）だ」と言われ、悪い気はしなかった。宿舎はバラックの小屋で、食事はロシアマダムの作ってくれた彼女等と同じもの（黒パン、肉入りスープ、トマト、キュウリの漬け物）が出され、もっと食べると言われ、久しぶりに満腹になる。病み上がりなので特に気を使ってくれたと思う。二十日ほど植え付け、雑役の仕事をしてかなり体力も戻った。

次の所へ移動（トラックで丸一日）。そこは最初入ソした時の建物と同じ丸太でできた建物で、そこには日本人が四十人ほど先に入っていた。その人たちの話によると、あちこちのラーゲルの体の弱い人たちのようでした。

作業は、森の中へ入って立ち枯れの木を探し人が担げる長さに切って持ち帰り、近くのソ連の将校宿舎へ運んで薪を作ることと、その官舎の雑役（家の中の壁に石灰を塗ることやベチカの積み替え、建具直し等）仕事で、時には官舎のマダムからごちそうになるこ

ともあって、特にノルマはなかった。お陰で入ソ以来の空き腹を抱えての食べることへの欲望は少しずつ薄らいだ。

前年の冬は病院で過ごしたので、シベリアの冬の外での仕事は初めてだった。気温が下がり零下四十度近くになると、晴れた日には空気中の水分が凍って、一面チカチカと銀紙の屑をまき散らしたように見えた。作業は中止で、集めた木を燃やして互いにお国自慢を話したものだ。

この雪は、風が吹くと道路等の高い所の雪全部が吹き飛んで低い所へ溜まり、そこへ足を踏み入れると腰まで埋まってしまう、また手で握っても粉を握っているようで固まらず、手を広げるとバラバラと落ちるほど乾燥したものだ。

川の水は全て凍り、井戸での水汲みも釣瓶の上げ下げのこぼれ水が内側で氷となり、穴がだんだん小さくなって、飯盒のような小さい物でも水汲みができなくなり、長い鉄棒で氷を中へ落として水汲みをした。

ロシア人の冬の靴はフェルト製だから、一面凍って

いても水の心配はないとのこと。

屋外の便所も凍って、小便是氷となり、大便是上へ上へと槍のようになり、鉄棒で碎いて凍った川へ捨てたものだ。

昭和二十二年の春になり道路作業（幅六メートルほどの土道）に出た。道端の草取りと、くぼんだ所への土砂入れをして平らにならす仕事で、一日二、三キロメートルほど進んだ。日を追うに従って遠くなり、後は野宿をしての作業になる。このような状態になると食糧は途切れ途切れになり、道端の野生のアカザやゴボウを採って食べた。

塩は、塩マスを食糧としてもらったとき、腹や鰓はらの中に入っている岩塩を保存しておいて大切に使った。一週間も塩気がないと、少しの高い物にもけつまずいて転ぶ始末で、貴重品だった。

夏ごろから山中での道造りが始まり、班ごとに丸太造りの片流れの屋根を造り、太い木の皮を剥いで雨しのぎとした。床は土をならし草を刈って敷きつめた。作業は、道幅七、八メートルほどで一人二メートルの

長さがノルマで、木の根の掘り起こしや、勾配のある所は平らに削り取り窪地へ運搬することで、前半の道路補修とは比べものにならない苦勞だった。雨が降ると食糧の遅配、欠配が続ぎ、山中の松の太木を倒してこぶし大の松の実を取って焼いたり、山ユリの根を掘って飯盒で茹でて食糧とした。食糧が来た。遅れた分多く来たかと思つたが届かなかつた。遅れた日数の分はどこかへ行つて、届いた日からの一週間分と分かり腹が立ち、運搬してきたソ連の兵隊に文句を言つたが「ニエズナーユ(知らない)」と言うだけなので、後から来た女医に小言を言つたが肩をすほめるだけだつた。

秋となり突然「ダモイ」と言われたが、もう誰も本気にしなかつた。でも、いつの日か帰れると信じ故郷を思い出し、無事に過ぎすことを第一と考え励ましかつた。

鉄道の引込線の近くに三十人程が到着、倉庫のような所を宿舎にして、その日から昼夜の別なく入ってくる貨物の荷降ろしと積み込みが始まつた。降ろすもの

は砂利、石灰、満州からの戦利品か、日本製の機械、住民の建具等まちまちで、積み込むのは五メートルほどの丸太だつた。時間が限られてノルマ仕事以上にきつかつた。貨車の来ない日もあり、その時は近くの製材工場での丸太引きをさせられた。

雪の降り出したころ移動で再び山の中へ。今度のラーゲルは板張り木造の建物だつたが、ここへ来るまで一週間ほど、野原の土を掘り(深さ二メートルほど)、屋根は丸太を並べて、掘つた土を乗せた穴倉生活をした。中にストーブが一つ、出入り口に扉が一枚の状態、寒さと暗いので薪を燃やして暖を採つたが、朝になると顔はすすけ真っ黒で、目は真っ赤に充血し、見られたものではなかつた。

この山の中の板張りラーゲルは大勢の日本兵が先に入つていて(三百人ほど)、敷地の周囲は鉄条網が張り巡らされてあつた。今までと違って出入りには必ず人数調べがあり、いつもこの点呼には三、四十分かかつて、寒さの中で閉口した。

ここでは伐採作業で、五メートルほどの丸太に伐

採、切断したものをトラックの来る道端まで運搬する仕事だった。ここで倒れてきた木の下敷きになって亡くなった人がいた。死体の始末は前に記した通りのようだった。仕事は雪の中での残業続きで、生きているのが不思議に思えた。二十三年の二月ごろ、ソ連の将校が「この中に大工、左官等の建物の仕事ができる者はいないか」と職人を集めに来た。私もこれ幸いと応募し、全部で三十人ほどが集まった。すぐ荷物（荷物は小さいリュック一つ）を持って来いとのことで、着のみ着のまま、シラミ共々トラック（幌掛け）に乗った。

四、五時間走り、降ろされたら周囲の建物に電灯の明かりが見えた。入ソ以来初めて見る電灯に、何とも言えない安堵の気持ち広がってきた。

入ったラーゲルは円形の建物で、床は二段になっていて（ちょうど桶を大きくしたような）、真ん中にベチカが燃えていた。ここには誰もおらず、二三日後と同じほどの数の仲間が入ってきた。

炊事場、便所、浴槽の整備に一週間ほどの日を過ぎ

した。一番嬉しかったのは浴場で、警戒兵が見ないことにして四人ほどが入れる木製の浴槽ができ、五日に一度ほど入浴できたことだ。シラミは熱湯消毒を繰り返したので、ゆっくり休むことができた。

このラーゲルはウオロシロフの駅の近くで、食糧の途絶えることもなく少しずつ元気が取り戻せた。

仕事は、ドークと呼んでいた家具製造工場で、レンガ造りの二階建て工場とその管理棟、ボイラー室、溶接工場とに分かれ、工場の一階の一部は蒸気での乾燥場になっていた。冬のことので二階での仕事は床暖房の感で暖かかった。

作業はいろいろで、乾燥場への木材の出し入れとその運搬、ボイラー室での石炭運搬と燃え殻の搬出、一階の片付けとコンクリート打ちならし、間仕切りのレンガ積み等で、ソ連の兵隊や民間人を交えての仕事でした。二階での加工組立はほとんどが女の人で、話しながらの仕事のように見えた。

このドークには入口に守衛がいて、ラーゲルから付いてきた兵隊はここで我々を引き渡し（人数確認の

上)、後は民間人のナチャニック(主任の名前はイワン・イワノヴィッチ・ベリコフ)の指図で幾つかの班に分かれ、夕方になるとその逆でカンボーイ(警戒兵)に引き渡し、ラーゲルまで帰った。

街を歩いていると、レンガ造りの建物に他のラーゲルの日本人の姿を見ることがあった。

二カ月もすると警戒兵も我々を信用してか、仕事場とラーゲルの往復に付き添う形で一緒に歩いている状態で、気楽な日々を送った。

工場の総責任者は政治部将校の中佐で、その下に大尉の技術将校がいた。時々この二人の将校から作業所外の民間の建物の修繕仕事を頼まれ、三、四人が四日、五日、一週間ほどの日程で行くようになり、作業方法は私に任せられるようになった。

ポイラー室での休憩の時、ポイラー運転手が話をしてくれた時は恐ろしくなった。その話とは「一九一八年〜一九二二年(大正七年〜十一年)に日本兵が攻めて来て(シベリア出兵)、ロシア人の捕虜を紐でくくってポイラーの中に入れたのを見たことがある。

が、我々はそのようなことはしないから安心しろ」とのことでした。

凍った川にも水が流れ出したころ、痛ましい事故が。それは、乾燥室の木材の入替え作業の時、入口の柱とバックしてきたトラックに挟まれて一人の死亡者を出したことだ。ナチャニックに話してラーゲルで一晩通夜をしたいと申し入れたが許されず、そのトラックでどこかへ運び出されたことだ。後でナチャニックが我々に「ソ連は今教会もなく、宗教はないからしかたない」ということをわざわざ通訳を連れてきて話をしてくれた。

特に仕事の変化もなく、その冬の正月には少しずつ蓄えた材料で入ソ以来初めての正月料理を作って無事を喜んだものだ。

この正月の前に他のラーゲルから三、四人民主化運動のアクチブ(リーダー)が入ってきて、『日本新聞』等を配り(三センチほどの厚さの本等)盛んに日本の天皇制を批判して氣勢を上げていたが、五十人前後のラーゲルのためか、朝夕の歩く途上で労働歌を歌う程

度で吊し上げなどはなく、そのうちにどこかへ消えてしまった。

正月も過ぎたある日、昼食の休憩の時キャピタン（大尉）に呼ばれた。仕事の話かと思って部屋に行く
と椅子を与えられ「お前、このソ連に残らないか、そして仕事をしないか、クラシーバマダム（きれいな奥さん）と住宅をお前にやるが」とのこと、考えたこともないので返答に困っていたら、明日返事をくれとのこと。ソ連のことなので、断るとどのような作業場へ移動させられるかもわからず気になるし、かといってソ連に住む気は全然ないので、一晩考えて、翌日キャピタンに「一度帰らせてほしい、両親に会って顔を見て今までの話をしてから来てほしい、地震のことが気になる（「日本新聞」にあった）ので」と返事した。寒い時であったが背中汗でビッシヨリだった。キャピタンに再度残るように言われたが、後には笑って了解してくれた。本当にホッとした。

昭和二十四年の夏近くになって、私と二十人ほどが「ダモイ」と言われ、ラーゲルと仲間に別れを告げ、

汽車に乗せられて、他所から来た二十人ほどと一緒に
なって汽車の中で一泊した翌日、下車させられた。

ナホトカに日本の船が少ないので船が来る間この
コルホーズの仕事を手伝えとのこと、また騙されたと思
った。

九月中ごろにナホトカに着いてあちこちの宿舎を移
動し、やっと日本の船に乗ることができた。

ナホトカでは民主運動なるものが盛んで、これに一
生懸命合わせて月日が過ぎた。

乗船の前に一人ずつ名前を呼ばれたが、その待つ間
の時間の長いこと、足踏みしながら日の丸の旗の見える
船を見ながら、もしも名前が呼ばれなかったらと思
って、いても立ってもいられない長い時間だった。

名前を呼ばれ、やっとの思いでタラップを上がる時
は、気はやりながらも一歩一歩踏みしめて船に上った。
船名は第一大拓丸だった。

昭和二十四年九月二十八日、舞鶴上陸、十月三日、
やっとのことで家に着いた。両親は大層老けて、母親
は涙だけでした。

私の青春は、昭和六年、小学校に入学、その年に満州事変が始まり、出征する「兵隊さん」を度々見送りに行つて、先生からは「悪い人を征伐に行くのだ」と教えられ、中学一年生の時の昭和十二年に盧溝橋事件、支那事変（日中戦争）が始まり、昭和十六年中学五年生のとき太平洋戦争（大東亜戦争）が始まり、高専（現大阪工大）は半年早く繰上げ卒業となつた。昭和二十五年までの二十年間の青春時代は何だったのか。今振り返ると、損をした気持ちと、その分を取り返すためにできるだけ健康で過ごしたいと思つてゐる。

悲惨な戦は二度と起こしてはならぬ。

かの地で亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

経 歴

大正十三年十二月二日 誕生 父・努 母・久

昭和十二年三月 福井市宝永小学校卒

十七年三月 大野中学校卒

十九年九月 現大阪工大建築科卒

十月 鉄道工業㈱入社

二十年三月 満州九二二部隊 入営（独立工兵一

二連隊）

八月 終戦 ソ連抑留

二十四年九月 帰国

二十五年二月 福井県建築課へ就職

二十七年四月 国家警察福井県本部会計課施設係

に転勤

三十五年四月 右退職

五月 横田建設株式会社設立 現在に至

る

建設関係の団体役員、ライオンズクラブ、ボーイスカウト（BS）連盟の役員などを歴任。BS日本連盟タカ賞など受賞。

【執筆者の紹介】

横田さんは学識経験等は抜群で、大野支部結成以来いろいろと助言をいただいています。

復員後は県の職員として、戦災、震災等の復興に尽力され、建設会社を設立されて社長に就任。大野市老人福祉センターの建設等数々の実績を残され、現在も会長として活躍をされています。

社会活動ではボーイスカウトのリーダーとして、またガールスカウトの設立をし、親子三代にわたり青年の育成に尽力され、県知事章を初め数々の顕彰を受けておられ、またライオンズクラブの各役員を務められ、社会活動に活躍され、今はOBとして現社長にバトンタッチをしましたが、毎日元気に会社に出ています。

お忙しいお身体ですが、労苦執筆の件をお願いしましたところ、快く引き受けて下さいました。ご本人の経歴は前ページ記載の通りです。

(福井県 林 俊男)

死に損なった寿命

福井県 上坂 朋男

私はシベリア抑留中、二度死にかけたことがあった。こんなことは、捕虜の間は生殺与奪の権利はロシア兵にあったことから仕方がなく、誰でも一度や二度はあったと思う。それを思い出して書くこととする。

一回目は昭和二十(一九四五)年十一月ごろ、シベリアに行つてすぐのことだった。「明日は朝からコムソモリスクに作業中の馬を受領に行くので、馬に乗れる者は申し出よ」ということで十人ほど選ばれた。小生も、コムソモリスクというところ一応の都会で、シベリアの密林ばかり見ているのも飽きるもので、一度見たいものと思つて申し出た。

翌日朝早くトラックに乗せられてコムソモリスクに連れて行かれた。都会の郊外の牧場まで町を見る機会